

陰嚢水腫を伴った精巣鞘膜結核の1例

京都大学医学部泌尿器科学教室

加 藤 篤 二

TUBERCULOSIS OF THE TUNICA VAGINALIS PROPRIA TESTIS
ASSOCIATED WITH HYDROCELE: REPORT OF A CASE

Tokuji KATō

From the Department of Urology, Faculty of Medicine, Kyoto University

A 17-year-old boy who had pleurisy one year prior to admission was operated on for hydrocele on left side. Multiple nodules were found on the tunica vaginalis, and they were histologically proved as tuberculosis. Testis and epididymis were entirely normal in this case.

はじめに

陰嚢水腫でぐうぜん発見された精巣鞘膜結核の1例について報告する。

症 例

患者：17才の男子。

初診：1936年4月27日。

主訴：無痛性の左陰嚢内腫脹。

個人歴：1932年ごろより発熱と胸痛を訴え左肋膜炎の診断をうけ約1ヵ月間臥床、治療をうけそのご軽快した。

現症：1936年4月15日ごろより左陰嚢が無痛性に腫脹したのに気づいた。尿症状その他は全くない。

所見：体格中等度で、ややよいそうしている。貧血(+)。胸部で心に異常はないが肺野で右鎖骨下は呼吸音鋭でラ音を聴取する。腹部で腎は両側とも触れず、外陰部では陰茎は異常なく、左陰嚢は腫脹して鵝卵大に至る。表面皮膚は正常、内容は透光性で波動を証明する。睾丸は圧痛なく、副睾丸はほぼ正常で腫大せず、ただ尾部はやや硬いが圧痛はない。精索には肥厚も圧痛も認めず、右睾丸、副睾丸、前立腺、精嚢は触診上正常、尿は清澄で、蛋白(-)、糖(-)、白血球(-)、赤血球(-)、上皮(-)、細菌(-)、PSPは1時間80%、2時間11%。以上により4月28日左副睾丸結核の疑いとしていちおう手術に移った。まず陰嚢

内水腫は穿刺で40ccの清澄液を証明した。睾丸被膜を縦に切開するに副睾丸は頭部は正常、尾部はふれてやや硬い。内側のTunica vaginalisには粟粒大より帽針頭大に至る多数の触れて硬い小結節形成がみられた。それで除嚢をおこなって検するに睾丸の断面はまったく正常で、副睾丸の頭部、体部、尾部の断面でも乾酪変性をきたしたり、特異な硬結はみられなかった。

病理組織所見：副睾丸尾部に接した部分の鞘膜面はただちに肉芽組織が露出し、細胞浸潤層は層状をなして広がっている(Fig. 1)。比較的乾酪壊死に乏しく主としてリンパ球、プラスマ細胞が主体で、これに類上皮細胞が混在し、しばしばラングハンス型巨細胞がみられる(Fig. 2, 3, 4)。その直下の副睾丸組織は腺腔ならびに周辺の間質において特記すべき結核様組織はみられない(Fig. 5)。その他の副睾丸においても同様である。睾丸組織では造精は未熟であるが結核病変は認められない。

ま と め

以上を総括すると既往に左肋膜炎の過去がある17才の男子で、左鎖骨下にラ音を聴取し、レ線検査はおこなってないが肺の病巣が想定せられる。その患者がぐうぜん左陰嚢の腫大に気づいた。副睾丸の尾部にやや硬結を認めたので手

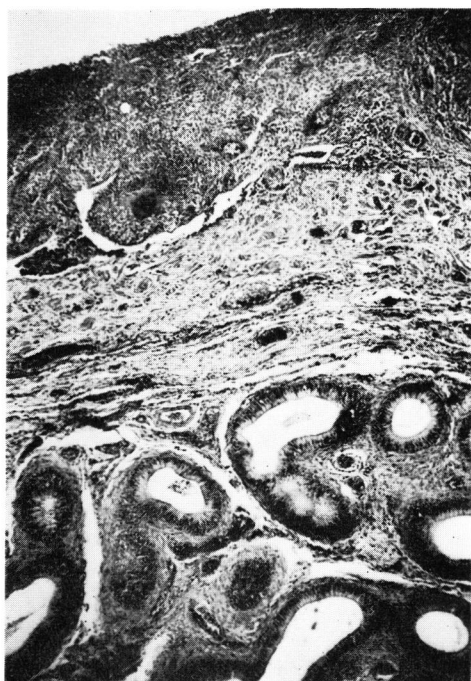


Fig. 1

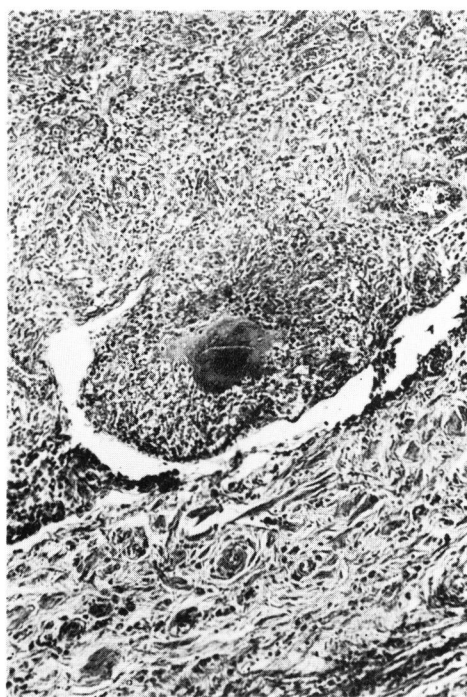


Fig. 2



Fig. 3

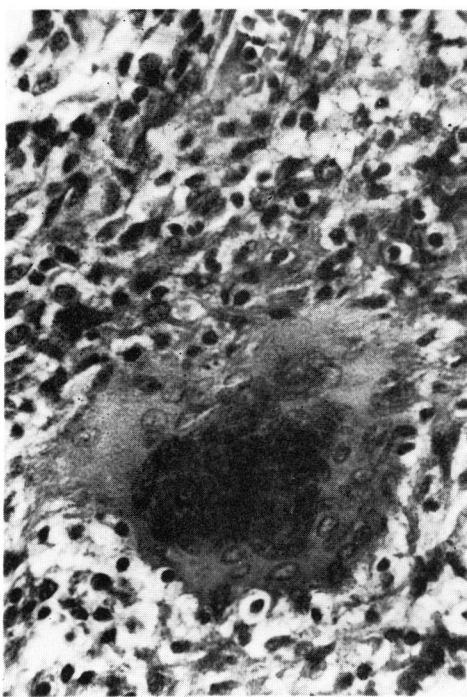


Fig. 4



Fig. 5

術をおこなったところ、陰嚢内の水腫のほかに鞘膜面に多数の結節を認めたので除睾をおこなった。睾丸、副睾丸の断面をみるにいずれも正常でいずこにも結核浸潤らしき所見を認めず。鞘膜は肥厚して組織学的には結核結節であったが、睾丸、副睾丸にはその所見を欠いていた。

文献上、性器結核として副睾丸の結核は臨床上最も多くしかもその多くが尾部を侵し、病変の拡大につれて睾丸を侵すとともに鞘膜にもまた波及して滲出液が分泌され肋膜炎同様貯留をきたすが、その頻度は約20%といわれる。鞘膜に発生する性器原発の結核には既往の結核性腹膜炎があって腹膜鞘状突起が同時に開存して変化

が波及する場合、全身粟粒結核の部分現象として鞘膜に播種状の粟粒結核の生ずる場合 (Demel) があるが、真に睾丸、副睾丸に結核病変がなく鞘膜のみに発生する場合は少ないが文献上まれながらある (Poncet, Chaliar, Delore). 血行性であってちょうど肋膜に滲出液が貯留すると同様の理論であるが、そのまれな発症として記載するしだいである。

文 献

- 1) 近藤：日本泌尿器科全書，4：251，1959.
- 2) 加藤・ほか：皮紀要，46：69，1950.

(1970年9月3日超特別掲載受付)